

主体的・対話的で深い学びを実現する授業構想【国語／現代の国語】

1. 対象 1年生

授業への意欲は高い生徒が多いが、国語に苦手意識を持ちなかなか学習に前向きになれない者もいる。これまで「現代の国語」では主に論理的文章を教材にしながら、文章の主旨を的確につかむこと、情報を集めて構成を工夫し書くこと、自分の思いを相手に分かりやすく話すこと等に取り組み、力をつけてきた。その一方で、初見の文章になると十分に取組めないこと、授業で身につけた読解力を探究活動など教科外の学習に活かさないことが課題である。文章や情報を自分自身に引きつけて解釈し、活用する力を身につけさせたい。

2. 単元名「文章を解釈し、考えを深める」（全5時間）

3. 単元で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	主張と論拠など、情報と情報との関係について理解することができる。 〔知識及び技能〕(2)ア
思考力、判断力、表現力等	目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈し、自分の考えを深めることができる。 〔思考力、判断力、表現力〕C「読むこと」(1)イ
学びに向かう力、人間性等	言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。 〔学びに向かう力、人間性等〕

4. 本時の目標 略

5. 授業展開【 単元 】 ※本時または単元いずれかに○を付けてください。

解決したい課題や問い

日本平動物園の一角に来園者が《自然の大切さを学ぶ》ための新エリアをつくるとしたら、どんなことが学べる、どんなエリアをつくるのがよいか。筆者の主張を踏まえ、考えを述べなさい。

考えるための材料

材料A	材料B	材料C
山本茂行「動物園というメディア」（数研出版『現代の国語』） 本文およびワークシート	国内諸施設の活動事例： 具体的な事例（動物園その他のHP掲載の案内文等）	材料Bの資料を相互比較して並べた JamBoard
想定される活動		
筆者の主張から、現代においては人間と自然との一体化の思想が失われ、他の生き物との命のつながりを実感しにくいこと、このような現状に対し動物園が果たし得る役割を読み取る。	筆者自身が園長を務めた施設、反対に時代背景や趣旨において筆者の目指す方向性とは異なると思われるもの等、動植物園・自然資料館についての資料から、各取組の意図や効果を読み取り、筆者の主張と比較する。	材料Bで見た各事例を「筆者の考えと合致する／しない」の序列をつけて並べ、比較の視点や事例間の共通点・相違点について検討する。

対話と思考（対話を通じた協働的な問題解決のプロセス）

【材料A：全体・4時間程度】

本文を意味段落ごとに整理しながら読解し、筆者の主張をつかむ。

- ・筆者は「自然と人のつながり」「同一性」を認識することが自然を大切にする実践のために必要だと考えている。でも、身近に生き物がいない人々にとってはこの認識をもつのは難しい。
- ・自然と人の生命のつながりを大切にする思想は、昔から日本の自然観に備わっていたものだと主張されている。現代の社会でそのような自然観を再生することは難しいが、動物園は「地域の動物とその生活環境」を積極的に扱っていくべきだ、と筆者は考えているんだね。

【材料B：個人、グループ】

動植物園や自然資料館等の取組について、展示や建設の意図を読み取り、筆者の主張と比較する。

《富山市ファミリーパーク》

- ・「郷土（富山そして日本）の動物たち」を中心に生態展示しているという点は、珍しい動物ばかりでなく地域の動物を重視すべきだという筆者の主張と合致する。
- ・「人も森も元気になる新しい里山」というコンセプトは、自然との一体感を重んじる日本の自然観を再現しようとしており、筆者の考えと合っている。

《ふじのくに地球環境史ミュージアム》

- ・静岡で「駿河湾」の生物を展示しており、「地域の自然を素材に」という筆者の主張と合う。
- ・「食物網の中に人間も含みこまれている」という展示があるのは、自然との一体化を基本とする日本の自然観に合致しているから筆者の主張と合っている。

《昭和20年代、日本橋高島屋の屋上でゾウが飼育されていた》

- ・「外国からゾウを購入して芸をさせる」というのは、筆者の考えには合わない。
- ・当時の来店客たちはこのゾウにかなり愛着をもっていたようだ。「身近な日常の空間に生き物がいた時代」だからそれでよかった、ということかもしれない。

《天王寺動物園》

- ・「動物の生息地の景観を可能な限り再現したうえで」の「生態的展示」であればその動物の生活環境を実際に体感できるから、自然や人間以外の生命に同調するという筆者の考えには合致するかもしれない。
- ・展示されている動物の生息地ごと「収奪」してきたと考えると、景観を再現しても生き物のいる「ケ」の空間を再現したとはいえず、筆者の主張には合わないのではないか。

【材料C：グループ、全体】

動植物園や自然資料館等の取組を並べ、比較の視点や事例間の共通点・相違点について検討する。

- ・資料を並べて自分なりに「思考する」ことも大切だけれど、見るだけよりも実際に自然と人の共生の場をつくってそこに身を置けるほうが「身近に感じる」ことになるのではないか。
- ・生き物が「こういう場所で生きているんだ」ということを実感して、彼らに「同一性」を感じる事ができれば、外国から来た「ハレ」の生き物ともつながることができるのかもしれない。

学習の成果（予想される生徒のあらわれ）

「地元の植生や自然環境を再現したエリアをつくり、鳥や虫、魚などそこに住む生き物たちを放し飼いにする。筆者が対象への身近な思いが大切だと述べていたように、自然の中で他の生命と一体になる体験を通じて、自然や生命の大切さを感じることができると思う。」

「地域の周辺にある山や森について知り、その空間を疑似体験することができる資料館をつくる。それにより、目には見えづらくなった自然と人のつながりや生き物との共生関係を認識しなおすことで、筆者の考える日本の自然観の再生に結びついていくのではないだろうか。」